

非対格動詞の出来事構造

－韓日両言語の比較対照の観点から－

金 情浩

キーワード：非対格動詞、非能格動詞、アスペクト、テイル形、進行

要旨

韓国語の非対格動詞は、「到着する、着陸する」などの出来事が終わった後の結果状態に焦点が置かれる<unacc-type-1>と「溶ける、凍る」などの出来事の途中過程に焦点が置かれる<unacc-type-2>とに二分類することができる。しかしどのタイプに属する非対格動詞であるかを問わず、それらの動詞に<進行(progress)>の相的意味を表わすアスペクト形態素の「テイル」が付加されると韓日両言語では、アスペクト的な意味の相違が見られる。しかし、その相的意味の違いは動詞のアスペクト性の違いに起因するものではなくて、両言語における「テイル形」の焦点の違いに起因するものである。

1. はじめに

Perlmutter (1978) の非対格仮説 (Unaccusative Hypothesis) 以来、自動詞は非対格 (unaccusative) 動詞と非能格 (unergative) 動詞に二分類されてきた。非能格動詞が意志を持つ動詞主 (protagonist control) を必要とするのに対して、非対格動詞はそれを必要としないところに特徴がある。¹⁾

- (1) a. John is walking along the street. (非能格)
b. Your clothes will soon dry (out). (非対格)

이 (2000) では、韓国語の非対格動詞をアスペクト的な観点から「unacc-type-1」と「unacc-type-2」の二つに分けている。²⁾ 本稿では、이 (2000) の分類におけるいくつかの問題点を提示する。それから、非対格動詞にアスペクト形態素 (-고 있- (go iss)/テイル) が付加されたときに見られる韓日両言語のアス

ペクト的意味の相違は、動詞のアスペクト性の違いに起因するものなのか、それとも「テイル」と「-고 있-(go iss)」といったアスペクト形態素の違いに起因するものなのかについて考察する。次節では、本稿の議論の対象となる非対格動詞を中心として、非能格動詞との相違について考察する。

2. 非対格動詞と非能格動詞

Vendler (1967) の分類は、＜状態性＞＜瞬間性＞＜限界性＞という三つの基準によって、英語の動詞を四つに分けている。

(2)	変化 (change)	継続 (duration)	限界 (telic)
状態 (states)	－	＋	－
活動 (activities)	＋	＋	－
到達 (achievements)	＋	－	＋
達成 (accomplishments)	＋	＋	＋

上記の四つのうち、非対格 (unaccusative) 動詞と非能格 (unergative) 動詞との間には、限界性 (telic) を持つかどうかには相違が見られる。つまり、「走る、笑う」のように意志を持つ動作主 (protagonist control) を必要とする非能格動詞は非限界性 (atelic) を持つので時間副詞句＜for hour＞と共起するが＜in hour＞とは共起しない(例 3)。そして、意志的な動作主を必要としない非対格動詞は限界性 (telic) を持つので＜in hour＞とは共起するが＜for hour＞とは共起できない(例 4)。

- (3) a. 太郎は3 時間も走った。
 b. * 太郎は1 時間で走った。³⁾

- (4) a. * 冷蔵庫の中の氷が1 時間凍った。
 b. 冷蔵庫の中の氷が5 分で凍った。

しかし、非限界性 (atelic) を持つ非能格動詞でも「200 メートル」のような限界的な範囲を与えると＜in hour＞と共起できる(例 5)。

(5) 太郎は200メートルを2分で走った。

(2)からすると、非対格動詞は<到達動詞>に、非能格動詞は<活動動詞>にそれぞれ含まれることがわかる。というのは、非能格動詞の場合は意志を持つ動作主によって、該当動詞が表わす出来事をいつ始めるか、またはいつ終わらせるかといった出来事全体をコントロールすることができるからである。しかし、意志を持つ動作主を伴わない非対格動詞の場合はそれが不可能である。

次に同じく限界性 (telic) を持つとされる<達成動詞>と非対格動詞を含む<到達動詞>を区別しておく必要がある。両グループの動詞はともに限界性をもつものの<達成動詞>の方は意志を持つ動作主を伴うというところが<到達動詞>とは違っている。まず、<到達動詞>と<達成動詞>の違いは、変化に至るまでの継続性があるかないかにある(例 6)。またどちらも<in+時間副詞>と共に起できるが、その際、<出来事の発生の前の時間>を表わすか、それとも<出来事の継続時間>を表わすかという意味の相違が見られる。

With accomplishments the stated time is understood as the event duration,
while achievements and semelfactives are understood to occur at the end of
the stated interval. (Kearns 2000: 208)

- (6) a. John died in an hour. <出来事の発生の前の時間>
b. Harry made a chair in an hour. <出来事の継続時間>

このことは(7)から見られるように、韓国語と日本語にも当てはまる。

- (7) a. 그는 투병생활 끝에, 2년만에 죽었다. <出来事の発生の前の時間>
(geuneun tubyeongsaenghwal kkeut-e, 2nyeonman-e jug-eossda.)⁴⁾
a'. 철수는 선생님도 풀지 못했던 문제를 2분만에 풀었다.
<出来事の継続時間> (cheolsuneun seonsaengnimdo pulji moshhaessdeon
munjeleul 2bunman-e pul-eossda.)
b. 彼は闘病生活のあげく、2年で死んだ。<出来事の発生の前の時間>
b'. 太郎は先生も出来なかった問題を2分で解いた。<出来事の継続時間>

3. 先行研究

이 (2000) では、韓国語の非対格動詞を語彙概念類型 (Lexical Conceptual Paradigm) によって、「도착하다 (到着する)」のような場所移動 (change of location) を表わす場合 (unacc-type-1) と「녹다 (溶ける)、얼다 (凍る)」のような状態変化 (change of state) を表わす場合 (unacc-type-2) の二つのタイプに分けている。

- (8) a. 기차가 1시간만에/*동안 도착했다.
 (gichaga 1siganman-e dong-an dochaghaessda.)⁵⁾
 (電車が1時間で/*1時間到着した。)
- b. 얼음이 1시간만에/??동안 녹았다.
 (eol-eum-i 1siganman-e dong-an nog-assda.)
 (氷が1時間で/*1時間溶けた) (이 2000)

<도착하다 (到着する)>と<녹다 (溶ける)>が<in hour>と共起するというこ
 とは、限界性 (telic) をもつ出来事であると判断される。이 (2000) では、<
 도착하다 (到着する)>も<녹다 (溶ける)>も結果中心の出来事構造を持つが、
 状態変化の概念を持つ<녹다 (溶ける)>は、程度 (degree) を表わす副詞句と共起
 するが、<도착하다 (到着する)>は場所移動が完全に終わってはじめて、完結の
 読みが得られるので、それが不可能であると述べている。

- (9) a. 얼음 녹았어?
 아니, 아직 안/덜/반쯤 녹았어.
 (氷、解けた?)
 (いいえ、まだ溶けてない/半分ぐらいしか溶けてない)
 (eol-eum nog-ass-eo?)
 (ani, ajig an/deol/banjeum nog-ass-eo.)
- b. 기차 도착했어?
 아니, 아직 안/*덜/*반쯤 도착했어.
 (電車、到着した?)
 (いいえ、まだ到着してない/半分ぐらいしか到着してない)
 (gicha dochaghaess-eo?)
 (ani, ajig an/deol/banjeum dochaghaess-eo.) (이 2000)

また、継続の意味を表わす「계속 (～続ける)」と共起した場合にもアスペクト的な意味の相違が見られる。

(10) a. 얼음이 계속 녹았다.

(氷が解け続けた。)

(eol-eum-i gyesog nog-assda.)

b. 기차가 계속 도착했다.

(電車が到着し続けた。)

(gichaga gyesog dochaghaessda.)

(이 2000)

(10a)の方は氷という物体が固体の状態から液体状態へと徐々に変化していく様子を表わしているが、(10b)の方は複数台の電車が次々と到着しているとの意味を表わしている。つまり、反復相のアスペクトの意味を表わしている。上の例文から、非対格動詞のうち<도착하다 (到着する)>類は<結果状態を重視するタイプ>、<녹다 (溶ける)>類は<出来事の途中過程を重視するタイプ>であると言える。

しかし、本稿で問題とするのは<進行 (progress)>のアスペクト的な意味を表わす「-고 있- (go iss)」を<unacc-type-1>と<unacc-type-2>にそれぞれ付加した場合、はたして 이 (2000) で述べられている区別が可能かどうかという点である。次の節では、上記のような韓国語に対応する日本語の非対格動詞に進行 (progress) の意味を表わすアスペクト形態素の「テイル」が付加された場合、両言語に見られるアスペクトの意味の相違とその原因について考察する。

4. 問題提示と提案

両言語における進行 (progress) の意味は、韓国語では「-고 있- (go iss)」を、日本語では「テイル」をそれぞれ動詞に付加することによって表わす(以後、これらを動詞の「テイル形」と呼ぶ)。しかし、(11)から窺えるように、一部の非対格動詞の「テイル形」は韓国語では<進行>の意味を表わすことができるのに対し、日本語ではそれが出来ない。⁶⁾

- (11) a. 세탁물이 잘 마르고 있다. <進行>
 (setagmul-i jal maleugo issda.)
 a'. 세탁물이 잘 말라 있다. <結果の状態>
 (setagmul-i jal malla issda.)
 b. *洗濯物が良く乾いている. <進行>
 b'. 洗濯物が良く乾いている. <結果の状態>

(11)の例から判断すると、両言語の非対格動詞の「テイル形」の違いは、動詞に起因するかのように見られる。しかし、この違いは動詞の性質ではなくて、「テイル形」の違いにあることを示すいくつかの例がある。まず第一に、(12)の例は、日本語の非対格動詞もまた、韓国語の非対格動詞と同じく、その着点 (Goal) に至るまでの変化過程の時間が認められることを示している。

- (12) a. ハンカチ、乾いた？
 まだ、半分ぐらいしか乾いてない。
 b. リンゴ、腐った？
 まだ、少ししか腐ってないので食べられる。

第二に、東京方言では、上記のような<進行>の意味を「テイル形」ではなくて他の形式、例えば、「ツツアル」または、「テキタ」などを用いて表わすことができる。

- (13) a. 洗濯物が乾きつつある。
 b. リンゴが腐ってきた。

さらに、日本の愛媛県宇和島方言には、韓国語の「-고 있- (go iss)」に相当する「テイル形」が見られる。つまり、「ヨル」と「トル」を用いて<進行>と<結果状態>の意味をそれぞれ表わす。これはちょうど<進行>と<結果状態>を表わす韓国語の「-고 있- (go iss)」と「-어 있- (eo iss)」に対応している。

(14) 愛媛県宇和島方言 (工藤 1995)

- a. 向うからバスが来よる。そこにおったら危ないぜ。 <進行>
 b. そこにバスが来とる。急がな乗り遅れるぜ。 <結果状態>

東京方言の「テイル形」が<進行>の読みを得るためには、(15)の例から窺えるように有生名詞 (animate noun) や自然力 (natural force) が必要であるかのように見られる。言い換えれば、自動詞を使役化 (causativized) する必要がある。

- (15) a. 太郎が洗濯物を乾かしている。 <進行>
 b. 太陽が氷を溶かしている。 <進行>

이 (2000) では、韓国語の「도착하다 (到着する)」類は、進行 (progress) を表わすアスペクト形態素の「-고 있- (go iss)」が付加されても<進行>のアスペクト的意味としては取れないと述べて(16)のような例を挙げている。

- (16) a. 얼음이 녹고 있다. (氷が溶けつつある)
 eol-eum-i noggo issda.
 b. *? 기차가 도착하고 있다. (電車が到着しつつある)
 gichaga dochaghago issda.

しかし「到着する」動詞は、アスペクト形態素の「-고 있- (go iss)」を伴って、<進行>の相的意味を表わすことができる (朴 1998)。⁷⁾ また、이 (2000) でも「도착하다 (到着する)」も出来事が進行中であることを表わす「-고 있- (go iss)」といっしょに使われることができるという事実を注で述べている。

では、韓国語と宇和島方言における「テイル形」は、<進行>と<結果継続>の両方のアスペクト的意味を表わすことができるのに対して、東京方言の「テイル形」では<結果継続>の読みしか得られないのはなぜだろうか。

そもそも問題の所在は韓国語と宇和島方言では、「-고 있- (go iss)」と「ヨル」が<進行>の意味を、「-어 있- (eo iss)」と「トル」が<結果状態>の意味をそれぞれ表わしているが、東京方言では<進行>と<結果状態>の両方の意味を「テイル形」だけで表わしているところにあると思われる。このことを踏まえるならば、両言語における非対格動詞に「テイル形」をつけた場合に見られるアスペクト的意味の相

違の原因は、どうも「テイル形」の中心的な意味によるものと思われる。言い換えれば、金田一 (1950) の日本語動詞の分類において、「活動動詞+テイル」以外は、すべて何らかの<状態>又は<結果の残存>などを表わしている。同じ旨の解釈は寺村 (1984) にも見られる。

~テイルの中心的な意味は、「既然の結果が現在存在していること」である、と考える。つまり、あることが実現して、それが終わってしまわず、その結果が何らかの形で現在に存在している (残っている)、というのが~テイルのアスペクト的意味の中心的、一般的意味である。
(寺村 1984: 127)

次に、影山 (1996) の反使役化 (anti-causativization) の概念を取り入れることによって説明できると思われる。反使役化とは、統語構造には現われないが、意味的に自動詞文にも使役主 (Agent) が存在することを仮定する概念で、例えば、'The door opened' という自動詞文におけるドアは、外的な力 (人間、強風、など) によってドアが開く場合もあるが、ドア自体の性質 (力) によって開く場合もある。この際、変化の対象であるドアが、同時に動作主 (Agent) でもあるという考え方である。反使役化の語彙概念構造は以下の通りである。

(17) 概念構造における反使役化 (影山 1996: 145)

[x CONTROL [y BECOME [y BE AT-z]]]

→ [x=y CONTROL [y BECOME [y BE AT-z]]]

影山 (1996) は、語彙概念構造では存在するが、統語上は現われないことを抑制 (suppression) と呼んでいる。反使役化における外的な動作主が存在するかどうかは (19) のようなテストで確認することができる。当然ながら、「走る、笑う」のように意志を持つ動作主 (protagonist control) を伴う非能格 (unergative) 動詞は、動作主がその出来事を成し遂げるのにどれぐらいの困難さを伴ったかを表わす難易副詞と共起できる (18a)。また、動作主が存在するので命令形も可能である (18b)。しかし、非能格動詞とは違って、意志を持つ動作主を伴わない非対格動詞の場合はそれが不可能であるはずである。しかしながら一部の非対格動詞ではそれが可能な場合がある (19)。このことは、非対格動詞にも統語構造には現われない動作主が内在

していることを支持してくれると思われる。

(18) a. 一生懸命に走ったら難なく200メートルを23秒で走れた。

b. 早く走れ。

(19) a. 分厚い布団を部屋の中に干しておいたら難なく乾いた。

b. (明日着る予定のズボンに向かって) 早く乾いてくれ。

上記のように、反使役化の概念を取り入れることによって、韓国語と宇和島方言の「テイル形」が<進行>の意味を表わすことができるのは、内在的な動作主が存在するからだという結論に達することになる。

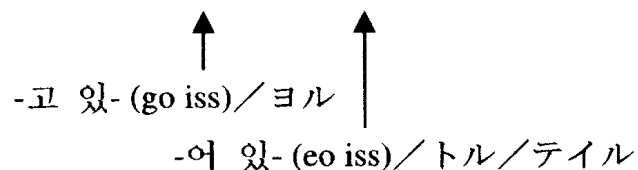
(20) 東京方言の非対格動詞 : <Theme>

韓国語／宇和島方言の非対格動詞 : <(Agent) Theme>

では、最後に残る問題は、東京方言の「テイル形」が<進行>の意味を表わすことができない原因はどこにあるかという点である。その原因はどうも両言語の「テイル形」における焦点の違いにあるかのように思われる。つまり、韓国語の「-고 있-(go iss)」と宇和島方言の「ヨル」は、出来事の過程、つまり<進行>に焦点を当てるのに対して、東京方言の「テイル形」は瞬間的な変化後の<結果の状態>に焦点を当てる。これに基づいて、韓国語と宇和島方言、東京方言の「テイル形」の焦点の違いを(21)に示す。

(21) 非対格動詞の「テイル形」の語彙概念構造

[x=y CONTROL [y BECOME [y BE AT-z]]]



(21)から分かるように、韓国語と宇和島方言の非対格の「テイル形」は<進行>に、東京方言では<結果継続>にそれぞれ焦点を当てていることがわかる。

4. おわりに

本稿では、韓国語と日本語の非対格動詞に「テイル形」をつけた場合に見られるアスペクト的意味の相違について考察した。両言語の一部の非対格動詞に「テイル形」をつけた場合、韓国語では<進行>の意味を表わすことができるが、東京方言では<進行>の意味を表わすことはできず、<結果継続>の意味だけを表わす場合がある。このことは影山 (1996) の反使役化の語彙概念を取り入れることにより、説明できることを論じた。また、上記のような違いは、韓国語と宇和島方言の「テイル形」は<進行(変化過程)>に焦点を当てているに対して、東京方言の「テイル形」は<結果状態>に焦点を当てているという違いに起因するもので、両言語における動詞のアスペクト的性質の違いからくるものではない。しかし、東京方言の「テイル形」が<進行>の意味を表わすためには、どうしても動作主 (Agent) が伴わなければならない。これは、反使役化の語彙概念構造における動作主と変化対象の同定 ($x=y$) では説明がつかないもので、今後の課題にしたい。

【注】

- (1) Johnson (2001) では、日本語の対格 (accusative) 動詞と非対格 (unaccusative) 動詞、非能格 (unergative) 動詞の準別基準として、「もう～ましたか」に対する「まだ～ません」と「まだ～ていません」の対応関係に基づいた論議が行われている。
- (2) 「unacc-type-1」は「到着する」のように<出来事の途中過程よりは結果状態を重視するタイプ>、「unacc-type-2」は「凍る、溶ける」のように<出来事の途中過程を重視するタイプ>をそれぞれ表わす。
- (3) 「ちょうど1時間がたった時点で走り出した」との意味としては可能。
- (4) 韓国語のローマ字表記は、新しく改正された「文化観光部告示第(2000.7.7)」の表記によっている。
- (5) ローマ字表記と日本語訳は筆者によるもの (以下同様)。
- (6) 本稿で、議論の対象とする非対格動詞は瞬間的な状態変化を伴う動詞グループで、起動相動詞とも呼ばれるものである。Jackendoff (1990) では、起動相の概念構造を以下のように表記している。

[EVENT] → [Event INCH ([State X])]

- (7) 朴 (1998) では、「到着する、到達する、着陸する」などの動詞を[+動態性、+完結性、+瞬間性、+接近性]のアスペクト性質を持つと述べて、これらの動詞グループを

＜移行動詞＞と呼んでいる。

【参考文献】

- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論一言語と認知の接点一』 くろしお出版.
- (1997) 「単語を超えた語形成」、影山太郎・由本陽子(共著) 『語形成と概念構造』 pp.128-197、研究社出版.
- (1999) 『形態論と意味』 くろしお出版.
- (2001) 「自動詞と他動詞の交替」、影山太郎(編) 『日英対照動詞の意味と構文』 pp.12-39、大修館書店.
- 金田一春彦 (1950) 「国語動詞の一分類」、同(1976)所収
(1976) 『国語動詞のアスペクト』 むぎ書房.
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト』 ひつじ書房.
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』 くろしお出版
- Jackendoff, Ray. (1990) *Semantic Structure*. Massachusetts: The MIT Press.
- Johnson, Yuki. (2001) The role of agentivity in accusatives, unergatives, and unaccusatives: A Japanese case. *CLS37*: 275-89.
- Kearns, Kate. (2000) *Semantics*. London: Macmillan Press.
- Perlmutter, David. (1978) Inversional passives and the unaccusative hypothesis. *Berkeley Linguistics Society* 4: 157-89.
- Vendler, Zeno. (1967) "Verbs and Times." *Linguistics in Philosophy*, Ithaca, NY: Cornell University Press, 97-121.
- 朴徳裕 (1998) 『国語의 動詞相研究』、韓国文化社
- 이준규, 이정민 (2000) 「한국어 비대격 동사의 사건구조」 한국인지과학회 2000년 춘계학술대회 논문집 (<http://nlpwww.sogang.ac.kr/~cogsci2000/paper.htm>)